

修士論文（要旨）
2013年1月

大学生における自己愛的脆弱性の特徴
- 自尊感情と理想自己志向性の観点から -

指導 井上 直子教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
211J4005
海老原蓉子

目次

I. 問題の背景と所在	1
1. 青年期の課題	1
2. Freud による初期の自己愛理論	2
3. Kohut と Kernberg による自己愛理論	3
4. Gabberd による自己愛理論の展開	4
5. 自己愛的脆弱性	4
6. 理想自己	6
7. 理想自己志向性	8
8. 自尊感情	8
9. まとめ	10
II. 目的	11
III. 研究方法	11
1. 調査対象と期間	11
2. 調査方法	11
3. 調査内容	11
1) 自己愛的脆弱性尺度短縮版 (Narcissistic Vulnerability Scale 短縮版 ; 上地・宮下、2009)	11
2) 自尊感情尺度 (Rosenberg.1965 : 星野。1970 翻訳版)	12
3) 質的な理想自己の測定法 (山田, 2004)	12
IV. 分析方法	13
V. 予測される結果	13
VI. 結果	14
1) NVS 短縮版の分析	14
NVS 短縮版の下位尺度間の関連	16
性別による自己愛的脆弱性の差の検討	16
自己愛的脆弱性の男女別の相関	16
2) 自尊感情尺度の分析	17
性別による自尊感情尺度の差の検討	18
3) 理想自己志向性尺度の分析	18
下位尺度間の相関	19
性別による理想自己志向性の差の検討	19
理想自己志向性の男女別の相関	20
4) 自己愛的脆弱性と自尊感情による群分け	20
自己愛的脆弱性と自尊感情の相関	20
自己愛的脆弱性と自尊感情による群わけ	21
2 群の平均値の差	22
5) 自己愛的脆弱性高群の理想自己に関する自由記述データの分析	23
自己愛的脆弱性の高い群における自尊感情の高低と理想自己の内容	23
自己愛的脆弱性の高い群の理想自己への意味づけによる分析	24

自己愛的脆弱性の高い群の理想自己への具体的方略による検討	25
VII. 考察	28
仮説 1 について	28
仮説 2 について	29
仮説 3 について	30
今後の展望	31
VIII. 謝辞	32
引用文献	
資料	

I. 問題の背景と所在

大学生に関する研究の中で多く取り上げられるものとして、自己愛があげられる。Kohutの理論から生まれ、近年類型としての把握でよく用いられる過敏型自己愛と通ずる概念として、自己愛的脆弱性と呼ばれるものがある。自己愛的脆弱性は、自己愛欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であることを指す(上地・宮下 2005)。このような特徴を持つ自己愛的脆弱性は、大なり小なりすべての人に存在するとされており、文化的背景から心理臨床の現場において、過敏型自己愛傾向の事例が多いこと(福井、1998)、一般青年を対象とした非臨床群において過敏型自己愛傾向が不適応と関連していること(上地・宮下、2005;小塩、2001;清水・岡村、2010)を考えれば、その脆弱性に焦点を置いた自己愛を調べることは、特に日本における青年期の傾向を理解する一助になると言えるだろう。

青年期で取り上げられる概念の一つとして、理想自己(ideal self)があげられる。これはRogers(1959)により、「個人が非常にそうありたいと望んでおり、それにもっとも高い価値をおいているが自己概念」と概念的に取り上げられて以来、数多くの研究が行われてきた。日本においては、理想自己と現実自己との不一致を考える研究が主流となっている。その中で山田(2004)は、なりたい理想像からの不一致の大きさは、高い現実検討能力を有し、自己を批判的に見つめることが出来るために設定され、自分をもっと高めたいという“成熟のしるし”としての機能もあるのではないかと述べている。

これまで述べてきたように、日本の青年期理解を進めていく上で、Kohutの自己愛理論の根底にある発達の視点を生かし、自己愛的脆弱性のもつ特徴を積極的な自己形成側面との関連を含めた、より包括的な視点で捉えることは、有意義であると考えられる。この自己形成的側面を論じるために、本研究では自尊感情と理想自己志向性を取り上げる。自尊感情は、自己愛と類似した概念として取りあげられ、その相違や関連に関する研究(小塩、1997, 2001;中山、2008)が行われることにより、その適応指標としての位置付けがより明らかにされるようになった。自己愛的脆弱性の自己形成的側面を検討するための比較対照群の設定にあたり、この自尊感情を適応指標として群分けの基準に用いることにする。理想自己志向性に着目した山田(2004)では、理想自己とそれに対する個人の関わり方と意欲と行動の側面を分けて検討することで、その自己形成的側面である“成熟のしるし”を描き出すことに成功している。本研究でもこの概念を採用することで自尊感情の高低といった指標に加えて、理想自己志向性の観点から自己愛的脆弱性の特徴を描くことによって、より具体的に自己愛的脆弱性自己形成的な側面との関連を検討できることが期待される。

II. 目的

本研究の目的は、大学生における自己愛的脆弱性の特徴を、自己形成的側面との関連から描き出すことを試みることにある。具体的には、自己愛的脆弱性が高く、かつ自尊感情が高い群と、自己愛的脆弱性が高く、かつ自尊感情が低い群とを比較し、自己形成的側面につながる理想自己志向性の特徴に違いが見いだせるかどうか、検討する。本研究により、特に日本における青年期の自己愛に関する理解が進み、それに適した支援を考える一助になるであろう。

Ⅲ. 方法

都内私立大学に通う大学生を対象に質問紙調査を行い、204名から回答を受け取った。調査期間は2012年6月～7月であった。使用した質問紙は、1) 自己愛的脆弱性尺度短縮版(NVS 短縮版)、2) 自尊感情尺度(Rosenberg,1965;星野訳,1970)、3) 質的な理想自己の測定法(山田,2004)の3つである。まず、個人の自己愛的脆弱性の高低を把握するために1)を用いた。その上で、本研究の目的に従い、自尊感情の高低については2)、理想自己の内容および理想自己志向性については3)により測定した。

Ⅳ.結果と考察

本研究の調査において、NVS 短縮版および自尊感情尺度それぞれの平均値を基準とした、自己愛的脆弱性と自尊感情の高低群の組み合わせにより、全体を4つの群に分けた。自己愛的脆弱性と自尊感情の間には弱い負の相関がみられたが($r=-.37, p<.01$)、自尊感情の高い群が一定数見出されたため、自己愛的脆弱性の高い2群(以下、高高群と脆高尊低群)の理想自己志向性の各因子得点の平均値の差を調べるために、独立したサンプルのt検定を行い比較した。また、自己愛的脆弱性の高い2群の設定した理想自己について詳細に検討するために、「理想自己の内容」、「理想自己を選んだ理由」、「理想自己を実現するための具体的な方略」についての自由記述を山田(2004)の結果を参考にKJ法でカテゴリ化し、 χ^2 検定を行った。

今回の調査において、「1.高高群は脆高尊低群に比べて、理想自己志向性が高いであろう。」という仮説は、「理想自己への行為」について、高高群が脆高尊低群に比べて、有意に高いという結果を得たことから($t(76) = 2.18, p<.05$)、部分的に支持された。「自己顕示抑制」「自己緩和不全」など、自己愛の未熟さを特徴として持つ人々であっても、現在の自分への肯定感を持ち、実際に行動が出来るか否かで、自己形成の過程を進めていくことに差がでるのではないかと、という知見を得られたのではないかとと思われる。

「2.脆高尊低群では、理想自己を決めた理由を「現在とのずれやあこがれ」に見出しやすいであろう」という仮説について、今回の調査では χ^2 検定、残差分析の結果より、脆高尊低群の方が、高高群よりも有意に高いという差が見られたことから($\chi^2 = 8.6, df=3, p<.05$)、支持されたといえる。「注目・賞賛欲求」に加え、「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」も持つ自己愛的脆弱性を持つ人々にとって、野心や顕示性の助けとなる理想であっても、その組み立ての未熟さから現実の自己との葛藤を引き起こし、理想自己志向性においても行為がままならないという結果になる、ということが推測される。

「3.高高群は方略有り」と回答する傾向があり、脆高尊低群は、理想自己を実現することへの希求有り」と回答する傾向にあるだろう。」という仮説については、高高群と脆高尊低群で χ^2 検定を行った結果、有意な差が見られなかったため、支持されなかった。こうした結果が出た要因のとして、今回の群分けの問題点、また人数の少なさがあげられる。今後は、本来の分析として平均値 $\pm 2SD$ を基準とした群分けによる比較検討ができるだけのデータ数を確保して研究を行うべきであると考えられる。

今回の調査によって、理想自己実現のための意欲よりも、その具体的な行動を促すことで、青年期の自己形成を促す手助けになる可能性が考えられた。自己形成的な側面も含めて自己愛的脆弱性の特徴を、今後もより包括的な視点で進めていく必要があると思われる。

引用文献

- Erikson, E.H. (1950) *Childhood and Society*. New York: W.W. Norton. (エリクソン、E.H. 仁科弥生(訳) (1977/1980), 幼少期と社会 I・II、みすず書房)
- Freud, S. (1914) On narcissism: an introduction. *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. London: Hogarth (フロイト、S. 懸田克躬・吉村博次 (1969)、ナルシシズム入門 懸田克躬・高橋義孝 (訳) フロイト著作集第5巻 人文書院 pp109-132)
- Higgins, E.T. (1987) Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Rogers, C.R. (1959) A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.), *Psychology: A study of science, Vol. 3. formulation of the social context*. New York: McGraw-Hill. Pp. 184-256
- Kernberg (1975) *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kohut, H. (1971) *The analysis of the self; A systematic approach to psychoanalytic treatment of narcissistic personality disorders*. International Universities Press. New York. (水野信義、笠原嘉監訳、1994、自己の分析、みすず書房、東京.)
- Kohut, H. (1977) *The Restoration of the Self*. New York: International Universities Press. (コフト、H. 本城秀次、笠原嘉監訳、1995、自己の修復、みすず書房)
- Kohut, H. (1977) *The restoration of the self*. International Universities Press. New York. (本城秀次、笠原嘉監訳、1995、自己の修復、みすず書房、東京.)
- Kohut, H. (1984) *How Does Analysis Cure?* Chicago: The University of Chicago Press. (コフト、H. 本庄秀次・笠原嘉監訳、1995、自己の治癒、みすず書房)
- 小此木啓吾 (1981) 自己愛人間_現代ナルシシズム論_ 朝日出版社
- 小此木啓吾 (1985) 現代精神分析の基礎理論 弘文堂
- Kohut, H. (1984) *How does analysis cure?* University of Chicago Press. Chicago. (本城秀次、笠原嘉監訳、1995、自己の治癒、みすず書房、東京.)
- Gabbard, G.O. (1989) Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532
- Gabbard, G.O. (1994) *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV version*. Washington, DC: American Psychiatric Press. (舘哲郎 (監訳) 1997 精神力動的 精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床編: II 軸障害 第16章 岩崎学術出版社)
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press. 水間玲子 (1998) 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究 46, 131-141
- 安達喜美子、菅宮正裕 (2000) 自己像と自尊感情および自己成長意欲との関連について—理想自己をとらえる際の新たな観点を加えて 茨城大学教育学部紀要 (教育科学) , 491, 43-155
- 新井幸子 (2001) 理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響 心

心理学研究、72,315-321

遠藤由美(1991) 理想自己に関する最近の研究動向・自己概念と適応との関連で - 上越教育大学研究紀要、10,19-36

遠藤由美(1992) 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄ほか(編)セルフエスティームの心理学：自己価値の欲求 ナカニシヤ出版、57-70.

遠藤由美(1992a) 自己認知と自己評価の関係・重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 - 教育心理学研究、40,187-163

遠藤由美(1992b) 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究、63,214-217

福井敏(1998) 古代的な自己—自己愛性障害— こころの科学 pp85-89

山田剛史(2004) 理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究 パーソナリティ研究 12 (2) ,59-72

西村馨(2004) 尊大で自己顕示的なタイプの状態像 上地雄一郎・宮下一博編 シリーズ荒れる青少年の心 もろい青少年のこころ—自己愛の障害— 発達臨床心理学的考察 北大路書房、49-55

上地雄一郎・宮下一博(2002) コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み 甲南女子大学研究紀要、38.1-10

上地雄一郎、宮下一博(2005) コフート心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究 14 (1) ,80-91

上地雄一郎(2009) Kohut の自己愛性パーソナリティ障害論の批判的検討 岡山大学大学院教育学研究科研究収録 第141号、143-152

上地雄一郎、宮下一博(2009) 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性、自己不一致、自尊感情の関連性 パーソナリティ研究 17 (3) ,280-291

小平英志(2000) 「最低限こうでなくてはいけない」自己と現実自己との不一致—不快感情との関連— 性格心理学研究 8(2), 113-124

内田知宏、上埜高志(2010) Roenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の県央—Mimura&Griffiths 訳の日本語版を用いて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報 58 (2) ,257-266

清水健司、岡村寿代(2010) 対人恐怖心性—自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究.58.23-33

伊藤亮、村瀬聡美、金井篤子(2011) 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれあい恐怖心性に及ぼす影響について—自己愛的脆弱性尺度を用いた検討— パーソナリティ研究.19.3.181-190

松岡弥玲(2006) 理想自己の生涯発達—変化の意味と調節過程を捉える— 教育心理学研究、54,45-54

三船直子・氏原寛(1991) 青年期の自己愛人格について - 実証的研究を中心にして - 大阪市立大学生生活科学部紀要、39,199-213

水間玲子(2002a) 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題—個人の主体性の問題— 京都大学外学院教育学研究科紀要、48,429-441

水間玲子(2002b) 理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について— 青年心理学研究、14,24-39

- 水間玲子 (2004) 理想自己への志向性の構造について—理想自己に関する主観的評定との関係から— 心理学研究、75.1.16-23
- 溝上慎一 (2001) 大学生の自己と生き方・大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 ナカニシヤ出版、pp19-49
- 新見直子・川口朋子・江村理奈・越中康治・目久田純一・前田健一 (2007) 青年期における自己愛傾向と自尊感情 広島大学心理学研究、7、125-138
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008) 対人恐怖心性—自己愛傾向 2次元モデルにおける自我同一性の様相 心理学研究、26,97-103
- 中村晃 (2004) 健全な自己愛と不健全な自己愛 千葉商大紀要 42(1), 1-20,
- 中村留美子 (2004) 自己愛 (ナルシズム) 氏原 寛・亀口憲治・成田義弘・東山紘久・山中康裕 (編) 心理臨床大辞典 改訂版 培風館 pp1077-1079
- 中山留美子 (2008) 肯定的自己評価の諸側面・自尊感情と自己愛に関する研究の概観から・名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要、心理発達科学、55,105-125
- 原田宗忠 (2008) 青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係 教育心理学研究。56・330-340
- 伊藤正哉、小玉正博 (2006) 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情を検討 - 本来感、自尊感情ならびにその随伴性に注目して - 教育心理学研究、54.222-232
- 相良麻里 (2006) 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究.15.61-63
- 小塩真司 (1998) 自己愛傾向に関する一研究：性役割との関連 名古屋大学教育学部紀要 (心理学)、45,45-53
- 小塩真司 (1998) 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 教育心理学研究、46、280-290
- 小塩真司 (1999) 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究 8,1,1-11
- 小塩真司 (2001) 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究 10 (1), 35-44
- 小塩真司 (2002) 自己愛傾向によって青年を分類する試み・対人関係と適応、友人によるイメージ評定からみた特徴・ 教育心理学研究、50,261-270
- 小塩真司 (2004) 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版、2-29
- 小塩真司・小平英志 (2005) 自己愛傾向と理想自己:理想自己の記述に注目して 人文学部研究論集 13, 37-54
- 大淵憲一 (2003) 満たされない自己愛—現代人の心理と対人葛藤 ちくま新書
- 落合萌子 (2009) 2 種類の自己愛と自尊心、対人不安との関係 パーソナリティ研究、18,1,57-60
- 清水健司・海塚敏郎 (2002) 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究、50,54-64
- 岡田努 (2007) 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究、15,2,135-148
- 川上夏季・石田弓 (2011) 理想自己と現実自己の差異が自己受容に及ぼす影響を緩和する要因・現実自己のメタレベル肯定および差異の認知に対する自己評価の視点から・ 広島大

学心理学研究、11, 259-277

久世敏夫（2001）青年期の人格形成・疾風怒濤の概念について・愛知学院大学文学部紀要、
30,35-41